銀河連邦のクリスマス

小野耕世

晶文社

著者について

小野耕世（おの・こうせい）

一九三九年十一月、東京に生まれ、小学生の頃から、外国マンガを読んで育つ。国際基督教大学卒業。海外コミックスの紹介、翻訳、また、映画評論、マンガ評論の分野で活躍。一九七四年、映画「キャロル」を製作。

著書―「バットマンになりたい」「ぼくの映画オモチャ箱」（晶文社）、「60年代のカタログ」（編著、主婦と生活社）

訳書―「イド王国の魔法つかい」「王者ターザン」（以上、鶴書房）、「ビアンカ」（東都書房）「フリッツ・ザ・キャット」（すばる書房）、「夢の国のリトル・ニモ」（パルコ出版）などのコミックス。

シナリオ「キャロル」。

日本SF作家クラブ、日本漫画家協会会員。

銀河連邦のクリスマス

一九七八年一二月一五日発行

著者　小野耕世

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

中央精版印刷・美行製本

©1978 Kosei Ono

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

銀河連邦のクリスマス

小野耕世

晶文社

晶文社　890円　0093-5578-3091

銀河連邦のクリスマス

小野耕世

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ブックデザイン　平野甲賀

銀河連邦のクリスマス　目次

獅子座に飛んだ男　11
円盤に乗った少女　30
星をひろった少年　50
地図をのぞいた女　71
雲を見あげた少年　93
宇宙戦争を見たふたり　112

努力しないでスーパーヒーローになる方法 130
銀河連邦から愛をこめて 149
シティ・スターからの招待状 170
テキサスから来た女たち 189
クリスマス・トゥリー作戦 209
あとがき 230

銀河連邦のクリスマス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

イラストレーション　新井苑子

獅子座に飛んだ男

自分はスーパーマンなのだと、健人(けんと)が気がついたのは、ほんの一週間ほど前のことだった。
そもそも、郵便配達が悪いんだ——と、彼は、いまでもぶつぶついう。あいつさえこなかったら、こんなことにはならなかったのに。その朝、ベルが鳴ったので、健人は、書きかけのマンガの原稿から手をはなし、玄関に出たのだった。すると郵便配達の男が、包みをひとつ手にして、立っていた。
「倉健人(くらけんと)さんですね」配達人がいった。「小包みです。それから百円ください」
「百円?」
「通関料です」
見るとそれは、アメリカから来た小包み郵便なのだった。いったい、どこから送ってきたのだろう。とにかく、百円払って受けとる。あて名はまちがいない。では、さし出し人は——?
さし出し人の名前はなかった。ただ、ジョージ・ワシントンの姿を描いた切手のうえの消印から、ニューヨークで発送されたものだということはわかった。開いてみると、シャツが一枚はいっている。

空色の長袖シャツ。生地は、木綿かな。手ざわりは悪くない。きれいだけど、新品かどうかわからない。メーカーのマークもないし……。そして彼は、シャツの胸に、赤く染めぬかれたS字のインシグニアを見た。

スーパーマンのマークではないか。このコスチューム・デザインなら、健人もとっくに知っていた。そんなマークを胸につけたTシャツを見ることは、別に珍らしくない。しかし、なぜ、こんなものが、自分のところに送られてきたのだろうか。

ことによったら、なにかの宣伝かもしれないな、と健人は思った。例えば、アメリカで、スーパーマンの映画が作られているとする。すると、アメリカ映画にとって、いまや日本は、海外では最大のマーケットであるから、宣伝のために、Tシャツとか、あいさつ状などを、日本の映画関係者に、まえもって送ってくる、ということは、無いことではない。それに、彼は、まだかけだしとはいえ、いちおうマンガ家なのだ。シャツでも送れば、アメリカのマンガの宣伝ぐらいしてくれると思ったのかもしれない。

健人は、ひとまずそう納得してみることにした。とにかく、着てみよう。彼は、身につけていた白いシャツを脱ぐと、アメリカからやってきたスーパーマンのシャツを、肌のうえに直接つける。ミディアム・サイズの彼には、そのシャツはやや大きかった。だいたい、アメリカ人が着るMサイズは、日本人にとっては、Lだと思ったほうがいい。むこうのSサイズで、こちらのふつうサイズなのだ。どうも、このシャツは、アメリカ寸法のM、いやことによったらLか。

でも、まあ袖を通し、長すぎる部分は、ちょっと折り返してみる。胸のあたりがだぶついていて、

あざやかなS字マークが、しわしわになっている。まあ、しかたがないな……。そうやって、とにかくシャツを着こんで部屋のなかに立ったときだった。彼は、突然、さとったのだ。おれはスーパーマンなのだと……。

健人は、自分が住んでいるアパートの二階の部屋から、外を見た。あのスーパーマンのシャツは、いま着ているスポーツ・シャツの下で、肌にくっついている。自分はスーパーマンなのだ——その想いが頭にひらめいたとたんに、彼は、いけない、これは隠すべき秘密だ、おれの正体は、他人に知られてはいけない、と考えたのだった。おれは、この地球の人間ではないのだ。スーパーマン民族の住んでいる、別の惑星からやってきた宇宙人なのだ。おれは超能力者なのだ。おれは、こうやって、松本零士式の、せまくるしい四畳半で、ひとり、少女マンガを描いているが、これは世をしのぶ仮りの姿であり、おれは超人間なのだ。そうだ、あのマンガの主人公と、同じような能力があるはずなのだ。

そんな想いがあたまにかけめぐっていたとき、彼の姿は、すでに空中にあった。思わず、二階の窓からとびおりていたのだ。飛んだのか？　いや、飛んだという意識すらなかった。気がつくと、彼は、コンクリートの地面に、すとんと降りていた。

落ちたのではない。降りたのだ。その証拠には、ちっとも痛くないではないか。ふつうの人間なら、二階から落ちてなんともないということはないはずだ。そうか、やはり、おれはスーパーマンなのだな……。

「なにを、ぶつぶついっているんだ」

耳のそばで、ものすごい声がした。急ブレーキをきしらせて、スポーツカーが、健人の横にとまっていた。
「もうちょっとで、ひいちまうところだったぞ」車から顔を出した男がどなった。「気をつけろ！」
アパートは、道の角にあった。車は、角を曲ったとたんに、二階から降りた健人にぶつかりそうになったのにちがいない。
「おれをひけるものなら、ひいてみればよかったな」健人は、そうどなりかえしていた。気の弱い彼が、こんな態度をとるなんて、知っている者が見たら、びっくりしたにちがいない。
「なんだと！」相手の男は、けしきばんだ。「自分をだれだと思ってるんだ。スーパーマンだとでもいうのか」
「およしなさいよ。おくれちゃうわ」助手席の女が興奮する男にいう。
走り去るスポーツカーを見送りながら、健人は、ほんとうに何か月かぶりで心の底から笑った。そうさ、おれはスーパーマンなんだぜ。彼はすぐに、ガールフレンドの梨江に、ぼくは超人になったと、電話した。

その日、彼は、いつものように、出版社に原稿を届けた。あのシャツを着たままだ。星からやってきた少女が、地球の少年に恋をしてしまう。しかし最後に、彼女は、自分が宇宙人であることが、恋人に知られるのを恐れて、自殺してしまう――というセンチメンタルなはなしだった。
「きみね、ここで最後に女を殺すことはないな」編集者はいった。

「これではSFとしては、中途半端だ」
「では、どうしたらいいでしょう」
「そうね、たとえば、彼女が、地球の恋人を自分の星へ連れていくっていうのはどうかな。そのほうが、ひろがりができる」
「ははあ。問題は、その星をどう描くかですね」
スーパーマンなら、よその星にとぶことができる。いつかやってみよう。健人は、出版社のビルを出ると、近くにある大きなホテルにはいった。スーパーマンだというのに、おれの行動には、なんの変化もないな、と思いながら。とにかく、自分がスーパーマンであることは、気づかれてはいけないのだ。倉健人が超人だと、ひとに知られては、正義のおこないはできない。しかし、正義といっても、なにをやったらいいのかね。
ホテルにはいったのは、そのなかにあるブック・ショップをのぞくためだった。スーパーマンになった以上、スーパーマンのマンガを読んでみる必要がある。マンガのヒーローと、自分とは同じではないにしても、なにか役に立つことがわかるにちがいない。スーパーマンとしての心得など、もとのマンガを読んでみれば、おのずとわかるかもしれないのだ。
彼はブック・ショップのすみに置いてあるコミック・ブックの山のなかから、スーパーマンの雑誌を三冊ほど買い、さらに、もう一冊、マンガではないアメリカの雑誌を買った。女性のヌード写真をいっぱいのせたいわゆるメンズ・マガジンというやつ。なにげなくめくっていたら、スーパーマンらしき絵が描いてあったのだ。喫茶店にはいると、自分のマンガの原稿を、どう描き直すか考えるまえ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com